蓮實重彦を十分に欲するということ

::

『「ボヴァリー夫人」論』の話者らしさをめぐって

阿部公彦

から一冊の本にして出すというのは、やはり人生観の大き にはふさわしいと考えていた。「それを例えば、筑摩書房 者はそんな「拡散状態」こそが「『ボヴァリー夫人』論」 にとっては入手困難な状態が長く続いていたのである。著 発表されてきた「『ボヴァリー夫人』論」は、多くの読者 過している。大学の紀要を含めあちこちにばらばらの形で のインタビューの時点ですでに予定からは一〇年以上が経 四)。当初の刊行予定は一九八一年だったわけだから、こ 子。「國文学 める(「インタビュー)蓮實重彥論のために」聞き手・金井美恵 る」との一九九二年の著者の弁には、清々しい諦めさえ読 まいになりはしないかというような危惧があるとさえ思え だった。「これを完成させてしまうと、自分の批評はおし 『「ボヴァリー夫人」論』は幻の書物として終わるはず 解釈と教材の研究」一九九二年七月号、六~二

> も版元は他ならぬ筑摩書房である。 今、ようやくこの「例えば」が本当になる時が来た。しか 言う(同)。しかし、その後さらに二二年の歳月が流れ、 な変革なしにはありえないのかもしれない(笑)」とまで

否定された。 たものである。めった斬りが横行し、伝統的な小説作法も どで、文芸評論家たちは文芸誌に掲載された作品群を前に して、しきりに「文学の死」や「小説の終わり」を宣告し 世界の方なのだから。八〇年代、日本の批評は元気だっ た。その勢いは批評が奉仕するはずの対象をも凌駕するほ ですか?」などという野暮な質問はしまい。変わったのは え、では蓮實さんの人生観に「大きな変革」があったの

「死」を宣告された文学作品ではなく、宣告した批評の側しかし、この状態は長くは続かなかった。死んだのは

的な言語状況が、まるで酔いが覚めるように白々とした覚 だったかとさえ思えるほどである。もちろんこの時代に批 醒感にとってかわられたのはまちがいない。 に思えたような、七○年代から八○年代にかけての乱反射 て別の領域の知見を援用した発言のいちいちがやけに新鮮 評が死滅したわけではなかった。しかし、文学作品につい

(新潮社)の刊行もあり、『ボヴァリー夫人』をめぐる考察 格的な文芸評論『「赤」の誘惑― な時代の到来は、むしろ好都合だった。なぜなら、そのよ がその刊行をようやく十分に欲したからだと言える。冊の書物として世に出るのは、このような過程をへて世界 ヴァリー夫人』論」が『「ボヴァリー夫人」論』という一 人々の嗅覚は刺激されつつあった。今、拡散的な「『ボ の核となる問題意識はじわじわと発酵度を高めていく。 が熟していったからである。二〇〇七年には著者久々の本 転換があったからこそ、「『ボヴァリー夫人』論」出版の機 うな「乱反射」から「鎮静」へ、そして「不毛」へという 少なくとも「『ボヴァリー夫人』論」にとってはこのよう に何らかの意味を見いだす人もいるかもしれない。ただ、 務仕事に忙殺された「失われた十年」と重なっていたこと そんな転換期が、蓮實重彦が某大学における行政的な事 ーフィクション論序説』

界に欲せられるようになった。では、一九八一年の段階で『ボヴァリー夫人』論』が、今になってようやく切実に世一九八一年に刊行されていてもおかしくはなかった

ろうか。 しれない(笑)」などと意地悪な笑みを浮かべてきたのだ ように、「人生観の大きな変革なしにはありえないのかも かったのか。だからその著者は、まるで恋人をじらすかの か。この書物に対する、「あなたが好き」の表明が足りな 知らず、従って十分に欲することもできなかったというの は、世界は「『ボヴァリー夫人』論」の魅力をまだ十分に

『「ボヴァリー夫人」論』の言わば宿命だったのではな と羽根をひろげて飛び立つ、そのための舞台がようやく た。そうした焼け野原に燦然と輝くべく屹立するのが 涼とした批評的焼け野原の風景が控えている必要があ 人』論」が一冊の書物としてまとまるには、その背後に荒のろしへとつながっていく。同じように、「『ボヴァリー夫 ような惨めな敗残の姿からはじまり、やがてそれが復讐の 負けたラグビー選手の血だらけ泥だらけのユニフォームの 事詩は、地獄に堕ちた天使たちの、まるで雨の日の試合に 思い浮かべるとよい。ジョン・ミルトンによるこの一大叙 ということなのである。たとえば『失楽園』の冒頭部分を 反射から不毛への転換期にこの上なくフィットする書物だ か。それよりも大事なのは、「『ボヴァリー夫人』論」が乱 な問題にすぎない。まあ、それなりに欲したのではない 論」を不十分にしか欲しなかったかどうかというのは些末 か。まるで『失楽園』の魔王よろしく、敗残の地からバッ 実のところ、一九八一年の世界が「『ボヴァリー夫人』

『「ボヴァリー夫人」論』の相貌

ということの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということはない。ただ、特筆すべきは、にもかかわらずそい。タイトルの通り本書はギュスターヴ・フローベールの間はつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評の想はつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評の想はつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評のははつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評のははつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評のははつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評のははつくと思うが、多くの作品論とはちがい、先行批評のは、タイトルの通り本書はギュスターヴ・フローベールのようとはない。ただ、特筆すべきは、にもかかわらずそいうことの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということの意味もあるのだが、これは後で触れよう。ということはない。

下章と終章を含めてぜんぶで一二の章にはそれぞれ明確 下章と終章を含めてぜんぶで一二の章にはそれぞれ明確 を目れた正大な肉体のように、膠着的な論述の展開を生み出して な問題意識がある。しかし、それぞれの章が独立して淡々 な問題意識がある。しかし、それぞれの章が独立して淡々 な問題意識がある。しかし、それぞれの章が独立して淡々 な問題意識がある。しかし、それぞれの章が独立して淡々 な問題意識がある。しかし、それぞれの章が独立して淡々 な問題意識がある。しかし、それぞれの章にはそれぞれ明確 で章と終章を含めてぜんぶで一二の章にはそれぞれ明確

発端にあるのは、ボヴァリー夫人という人物の実在に関

夫人』という小説をボヴァリー夫人の人生の物語として読夫人』という小説をボヴァリー夫人の人生の物語として読が、実は作品中、ただの一度も「エンマ・ボヴァリー」とが、実は作品中、ただの一度も「エンマ・ボヴァリー」とが、実は作品中、ただの一度も「エンマ・ボヴァリー」とが、実は作品中、ただの一度も「エンマ・ボヴァリー」という名称は用いられていないといった指摘は、あるいは屁いう名称は用いられていないといった指摘は、あるいは屁いう名称は用いられていないといった指摘は、あるいは屁が、実は作品中、ただの一度も「エンマ・ボヴァリー」との喚起にある。

そもそも小説における人物とは何か? 小説の言葉は誰そもそも小説における人物とは何か? 小説の言葉は誰をもそも小説における人物とは何か? 小説の言葉は誰をもだことにはならないということたちはじわじわと著者の向かおうとする方向を思い知るだたちはじわじわと著者の向かおうとする方向を思い知るだたちはじわじわと著者の向かおうとする方向を思い知るだたちはじわじわと著者の向かおうとする方向を思い知るだたちはじわじわと著者の一種の不分明なさま」(ジャック・と、世界であることと、世界に生きているということなのである。

が華麗に展開される。そこで柱となるのは、テクストのいをはじめ、かずかずの論考の中で示されてきた批評の方法蓮實節の面目躍如となる。『夏目漱石論』『大江健三郎論』こうしたいわば準備と助走をへて、第Ⅱ章以降はまさに

わばこだわりに注目するテーマ批評(主題論)と、もう少 裕はないが、たとえば「懇願と報酬」と題された第Ⅱ章で チである。これらの章の内容をいちいち細かく解説する余 し巨視的にナラティブを見渡し分析する説話論的アプロー と喝采を送りたくなる着眼が示される。『ボヴァリー夫人』 は、よくぞそのようなテクスト的ふるまいに気づかれた! の「懇願」は、「一貫した意志を欠いているとしか思えな 権力者にお願いをしても「うん」とも「すん」とも答えが るが故にむなしい」(九四)とのこと。要するに、 い夫のいかにも推測しがたい決断に向けられており、であ 返ってこないので、聞いてもらっているのかどうかよくわ 気をなくしてしまう。ところが、ときに不意にその反応が からない。それでお願いした方はすっかりくたびれ、やる 伝わってくることもある、といった厄介な状況が『ボヴァ 体への抑圧的な働きかけをいささかも誇示するものではな 人』に描かれている権力は、『命令』や『禁止』による個 の権力構造のあり方として示してみせる。「『ボヴァリー夫 を許された者たちは、いわば反応の不在によって、 えるものの必ずしもそうではない。なぜなら「自由な発言 い」(一〇一~一〇二)のだが、これは一見自由主義的に見 ゆるやかな消耗による疲弊した状況に陥るしかないから デリケートでありながら、何と広がりのある見方だろう。 だ」(一〇二)。何とデリケートなポイントだろう。そして -夫人』の世界では生じている。著者はこれを時代特有 いくら

ぐる、著者のもっとも得意とするフェティッシュな分析 せているのである。ジューシーと言えば、第V章の足をめ 意識さえ忘れて陶然としそうになるほどの、フローベー は、『ボヴァリー夫人』をめぐる批評を読んでいるという の語りの変奏とも読めるし、第12章の数をめぐる考察で 異様なほどに律儀で、一以下の数字を「四分の一」、「三分 なる。考えてもみてほしい、フローベールが数字に関して 実践され、思わず「きゃっ」などと喜悦の声をあげそうに は、テクストに対する著者のからみが朗らかに伸びやかに -夫人』は、より肉厚でよりジューシーな作品となりおお とともに、「『二』から『二十』までのすべての数字をテク の一」、「二分の一」、「三分の二」というふうに丁寧に拾う などという〝発見〟をなしえたこと自体、賞賛に値する ストのさまざまな場所に満遍なく配分している」(五五一) なるほどこのような指摘をへて読み直される『ボヴァリ が、そんな発見を何かの成果であるかのように堂々と説得 的に誇示しえるのは、著者の批評的芸達者ぶりゆえという ほかないだろう。

グ等、やや堕落した形に姿を変えて形骸化・大衆化し、小ーチは英米圏のアカデミズムでは、シンボル・ハンティンとてもお手本にはなるまいと思う。こうした批評的アプロは、若い学生の刺激にはなっても、その並外れた洗練ゆえクストの中に潜む傾向を著者が採集し提示していくさまこうして構造分析と呼ぶにはあまりに繊細な手つきでテレスコー

寄り添った回答が提示されることになる。 の議論を覆したうえで、あくまで「テクスト的な現実」に 前提としているのに対し 題をめぐっては が果たしてどれくらいものを考えられる人なのかという問 の依存の危険にはくり返し注意喚起がなされるし、エンマ 章から第1章にかけて提起された、固有名的存在への過度 また得意でもない」ためである(六四)。だからこそ、 類は『テクスト』を読むことをあまり好んではいないし、 返されるのは、著者の言葉を借りれば「端的に言って、 れているのはいつものことである。このような悪癖が繰り に、ふと気づくとそれがテクストを読まないために濫用さ 「テクスト的な現実」をよりよく読むためのものであるの もそのあたりは重々承知。あらゆる批評の方法は、本来は ためのそれとして流通してきた経緯がある。もちろん著者 説を読むための装置というよりは、むしろ小説を読まない 多くの批評家がその抽象思考の欠如を 自由間接話法をめぐる先行者

き合う著者の姿勢には、単なるアカデミズムへの敬意以上、などの――仏文学的というよりはほとんど英文学的な――などの――仏文学的というよりはほとんど英文学的な――な名前があちこちで登場するのは当然として、ちょっぴりで、パシュラール、フーコー、デリダといった華やかプーレ、バシュラール、フーコー、デリダといった華やかプーレ、バシュラール、フーコー、デリダといった華やかプーレ、バシュラール、フーコー、デリダといった華やかプーレ、バシュラール、フーコー、デリダといった華やか

この長大な侖学が、っていたの何かが読み取れると思える。

この長大な論考がいったいどのようなスカッと胸のすくもしくは破綻させるための著者のひそかな策略なのかもしくは破綻させるための著者のひそかな策略なのかもしくないうう。それはひょっとすると、この論考を終わらせることにあるのだろう。それはひょっとすると、この論考を終わらせることにあるのだろう。それはひょっとすると、この論考を終わらせることにあるのだろう。それはひょっとすると、この論考を終わらせることにあるのだろう。それはひょっとすると、この論考を終わらせることにあるのだろう。それはひょっとすると、この論考を終わらせることにあるのだろう。それはひょっとすると、この論考を抱く人もいるかもしはないが、おそらく本当のポイントは、外部からの唐突な声の到が、おそらく本当のポイントは、外部からの唐突な声の到が、おそらく本当のポイントは、外部からの唐突な声の到れないが、おそらく本当のである。これまでのような人が、おそらく本当のである。これまでのような人もとのといる。

「いささか」で読む『「ボヴァリー夫人」論』

『新明解国語辞典』あたりに載っていてもおかしくないほるのだが――その文体である。「蓮實的」という形容詞がて考察するならどうしてもこれは避けて通れない問題とな取っかかりとしたいのは――そして蓮實重彦の著述につい取っかかりとしたいのは――そして蓮實重彦の著述についる。」は、今や十分に欲せられることとなったのか。人」論』は、今や十分に欲せられることとなったのか。人」論』は、今や十分に欲せられることとなったのか。さて、マッピングはこれぐらいにしておこう。あらためさて、マッピングはこれぐらいにしておこう。あらため

では、他の文体にある種の特徴があり強い感染力を持つということは今更指摘するまでもない。かくいう筆者も『「ボラことは今更指摘するまでもない。かくいう筆者も『「ボヴァリー夫人」論』を論ずるにあたって、気をつけてはいヴァリー夫人」論』を論ずるにあたって、気をつけてはいヴァリー夫人」論』を論ずるにあたって、気をつけてはいヴァリー夫人」論』を論ずるにかないのである。

まざまな批評的試みの総決算とも呼べる『「ボヴァリー夫 い。以下に、第Ⅲ章から使用例をひとつあげてみよう。的な「いささか」という語に注目することで解明してみた 草稿の比較検討や引用出典の吟味がなされることもある。 中継風の読みを実践する。エロスへの耽溺をあおることも な現実への没入を演じ、またときには少し身を引いた実況 ン論が開陳されるかと思えば、ときには華麗にテクスト的 人」論』は多面性をもった書物である。すでに触れたよう て個別の単語のニュアンスをめぐり詳細で粘り強いクロー しかし、 しかし、そうした一連の批評的所作をつらぬいて何かが ときに言語哲学の知見を批判的に検討するフィクショ ためしにそれを、今回の書物の中でもとりわけ特徴 ーディングを行ったり、 一転、テクストを穴のあくほど見つめるようにし 一口に文体とは言っても、これまでの著者のさ 文献学的な誠実さとともに

こうした古色蒼然たる「感情」の優位にしたがっ

1/2

然とさせられる。(四九三)遊び」という発想もふさわしかろうといささか啞理論家には、なるほど「メイクビリーヴ゠ごっこしたりしながら作品を読むことしか想像できないて作中人物の振る舞いに「共感」したり、「反発」

明部分だけでも文意はわかるかと思うが、ここでは人 のに、いったいどこからくるのか。おそらくここで「蓮 変情は、いったいどこからくるのか。おそらくここで「蓮 では、いかにも蓮實的な文体ですね、と無意識のうち にも首肯しているのではないだろうか。では、そのように にも首肯しているのではないだろうか。では、そのように にも首肯しているのではないだろうか。では、そのように を満論の方向を感知する前に、この一節を読んだ多く ような議論の方向を感知する前に、この一節を読んだ多く ような議論の方向を感知する前に、この一節を読んだ多く ような議論に先行してこちらを説得してしまう「蓮實的」という をが、、ここでは人 のに、「啞然」といったいくつかの特徴的な語彙ではない ない、「啞然」といったいくつかの特徴的な語彙ではない ない、「啞然」といったいくつかの特徴的な語彙ではない ない、「啞然」といったいくつかの特徴的な語彙ではない ない、「啞然」といったいくつかの特徴的な語彙ではない という。

る第X章の次の一節でも、語彙は大きな効果を発揮する。接しているかを、シャルルとの比較を通して丁寧に精査すもうひとつ例を見てみよう。エンマがどのように世界と

つまり、ここでのヒロインは、彼女自身のからだ

からたちのぼる匂いをいわば「報酬」として享受しているその夫のように、ごく身近なところにも世界の未知の表情が息づいており、それに触れることで思いきり知覚を震わせることなどまずないのだから、あえて鈍感とまではいわぬにせよ、少のだから、あえて鈍感とまではいわぬにせよ、少のだから、あえて鈍感とまではいわぬにせよ、少のだから、あえて鈍感とまではいわぬにせよ、少のだから、あえて鈍感とまではいわぬにせよい。こくりでは、いささか繊細さに欠ける存在として語られても、いささか繊細さに欠ける存在として語られても、いささか繊細さに欠ける存在として語られているのである。(六一二~六一三)

る。ささか」といった副詞的表現が特徴的な使われ方をしていささか」といった副詞的表現が特徴的な使われ方をしていことである。そのエンマを語るにあたって、「あえて」「いれないが、「いささか繊細さに欠ける存在」とはエンマのれないが、「いささか繊細さに欠ける存在」とはエンマの主語と述語との間に距離があるのでわかりにくいかもし主語と述語との間に距離があるのでわかりにくいかもし

でに三〇年以上前からこうした語彙を使いこなしていたのでに三〇年以上前からこうした語彙を使いこなしていたのき、この語を日常会話の中で使う人は、現在、それほど多くはいないだろう。口語というよりは、どちらかというと文章語であり、もっと言うとやや「古色蒼然」とした語である。だから、その使用者には何となく "年配者の風た"、この語を日常会話の中で使う人は、現在、それほどをはいないがら、その使用者には何となく "年配者の風情"が漂う。もちろん、著者の実年齢はここではまったく関係ない。著者の実年齢はここではまったく関係ない。著者の実年齢はここではまった。

である。九八八年に刊行されていてもおかしくはなかったものなの九八一年に刊行されていてもおかしくはなかったものなのであり、この『「ボヴァリー夫人」論』にしても本来は一であり、この『「ボヴァリー夫人」論』

ることにも注意しておく必要はあるだろう。 をこらえるような、茶目っ気あふれる紳士の影が垣間見え 仮面をかぶったうえで、「むふふ」と思わず漏れ出る笑い 察知する感性がそこにはある。もちろん、そうした強面な "若さ』や 間違いない。無防備に〝真心〟なるものをさらけ出し押し つけるような態度の、そのナルシシズムや暴力性を敏感に ぶだろうか。こうした年上風の落ち着きが、その裏には、 手としてはとても面倒くさい人。そんな一連の印象が浮か も簡単にはうんと言ってくれそうにない、理屈っぽくて細 かい人。官僚的でガードが堅く隙の無い人。だから論争相 う人はいるかもしれない。そこまでいかなくとも、 そのことによって、文章にはどのような出来事が生ずるの ではこのように著者の実年齢とは無関係に〝年上の風 を漂わせることにはどのような意味があるのだろう。 たとえば何となく、手強い渋面、を思い浮かべるとい "青さ』に対する警戒心を隠し持っているのも いかに

「……あえて鈍感とまではいわぬにせよ、少なくとも、『心きとしてより重要なものが別にあることも見えてくる。効果とまったく無縁ではないにせよ、"年上の風情"の働の引用箇所をあらためて振り返ってみると、そうした渋面しかし、これだけではまだ十分な読みとはならない。今

情』《coeur》(Bovary 130)において、また『感覚』《sentiment》(同前)においても、いささか繊細さに欠ける存在として語られているのである」。ここで目につくのは「あえて」や「いささか」などの語を要所に配置しながら、まるでさじ加減を微妙に調節するようにして、「程度」についての細かい言葉の操作が繰り広げられているということである。とりわけ重要なのは、言葉の意味をいかに差しいっことでもある。つまり、「鈍感」「心情」「感覚」「繊細さに欠ける」といったややパンチのある表現を登場させる一方で、決して手綱は放さずに、抑えて抑えて、と言わんばかりの調整が執拗なほどに行われているのである。

《understatement》の美学である。言葉の使用をめぐって、《understatement》の美学である。言葉の使用をめぐって、より多くより大げさに言うよりも、より少なくより小さく言うことで鋭く狙いを達せようとすること。これはたとえ言うことで鋭く狙いを達せようとすること。これはたとえ言うことで鋭く狙いを達せようとすること。これはたとえ言うことで鋭く狙いを達せようとする。

も要請するのは、何らかの形でそこに人物的なものがからうのも、このような「程度」をめぐる細かい操作をそもそ作法や取り澄ましを見るだけでもまだ十分ではない。といただ、『手強い渋面』や潜み笑いの陰に、宮廷文化風の

10

を語り手が意識しているからなのである。マという作中人物をめぐる議論がそこで行われていることの語りがことさら目につく形で行われるのは、何よりエンよ」とか「いささか繊細さに欠ける存在」といった微調整よ」とか

論者たちの「テクスト的な現実」への鈍感さを著者が許容 送る姿勢もそこに根を持つと言えるだろうし、そもそもエ 対しつねに斜(はす)に見るような視線を送るのである。 深い距離がそこでは保持される。だから、著者はエンマに 住むフィクション世界に対する強い関心を抱きつつも、 感知しているためなのである。 できないのも、人物的なものに対する配慮の欠如をそこに の前提としたり、エンマに平気で感情移入を行ったりする 顔や身体中心部ではなく手や足へフェティッシュな視線を なものに対する恥じらいとでも呼びたくなるような、 りすることは自分には許さない。むしろほとんどエンマ的 して正面からそれを睨みつけたり、 ンマ・ボヴァリーという固有名やその人物像を安易に議論 そこには著者のある姿勢が垣間見える。一方にエンマ 断定的な言葉を吐い 遠慮 決の te

『「ボヴァリー夫人」論』のヒューマンな部分

『「ボヴァリー夫人」論』と題された書物の原点にあること重な態度をとるのだろう。人物的なものをめぐる繊細さがでは、著者は人物的なものを語るに際してなぜかくも慎

抜きがたく見られる『話者性』ではないかと思う。 るべきだろう。そこで鍵となるのは、著者の批評的実践に うな目的地へと我々読者を誘うかに、そろそろ考察を進め してきたが、そうした出発点がいったいどのよ

を読むためには障害にすらなりうることを示唆する。 ことがほとんど無意味であるどころか、本当の意味で小説 面をとりあげ、そこにエンマという一人の人物を措定する で、エンマがはじめて森の中でロドルフに身をまかせる場 わけ喚起的な一連の議論に見ることができる。著者はここ うした議論のひとつの帰結は第1章の、本書の中でもとり い誰の心理なのか? 写の背後に想定される「人」は誰なのか? をめぐる考察では、文を思っているのはいったい誰なのでかなり集中的に検討されている。たとえば自由間接話法 小説言語における「人」の問題は、本書のとくに第Ⅳ章 といった問題が提示される。その延長上で、場面描 といった問題も取り上げられる。そ これはいった

は、それが物語の数ある挿話のひとつでしかな 体と化した存在が、不意に距離なしに接しあう世

もはや名ざされることすらない匿名の

る。忍耐強くアカデミックな議論に付き合い、ひとつひと

において本書の狙いが露わになっていると見ることができ 「読むとはどういうことか?」という問題。そして、ここ のは、実はきわめてベーシックな問題である。すなわち

著者がここでいささかの興奮と力感とともに語っている

理解されねばならない。(八四~八五)

を察知することが、「読む」ことにほかならぬと を失う瞬間が「テクスト」に書きこまれているの 「エンマ」にほかならぬと同定することさえ意味

れにあたる

読む。だが、そのとき、ある文章の中

いま見たロドルフとの森への散策の挿話がそ

たとえ

-で「彼女」と呼ばれている人物が

確かに、人は、何よりもまず「作品」の言葉を

ことをあやうく失念しそうになる。読むものは、 えに同調するといった事態に立ちあうわれわれ 界とひとつになってひそかに生の鼓動を脈打ち始 める瞬間、言葉がみずからの脈動を介してその震 デミックな研究書であるよりも、まずは徹頭徹尾啓蒙的な 践してみせることにある。『「ボヴァリー夫人」論』はアカ ろ読むとはどういうことか、その基本的な所作を実演・実 きもあるかもしれないが、著者のほんとうの関心は、 部分から、あるいはこの本がアカデミックな発見をひけら かし、手柄を見せつけることに執心していると錯覚する向 つ先行研究を覆してはおのれの論点を構築的に示していく

むし

はなくて、 る。しかし、ここで要請されているのは、勝手に登場人物 相手を生かすような読者なのである。そういう「人」を得 をはかるような、つまり相手から身を遠ざけることでこそ 者、すなわち慎重に相手の「程度」に耳を澄ましさじ加減 に自分を投影するような厚かましい読者ではない。そうで むしろ「いささか」という語彙に具現された読

の「話者」の独特さについて、次のように述べている。 細に検討されているが、著者はそこで『ボヴァリー夫人』 筆者は考えている。本書でも「話者」の問題は第Ⅳ章で詳 ある種の「話者」になるということだったのではないかと

が見えてはいないと口にすることで、「語る」こ 視線ではとらえがたい光景をあえて提示し、それ 立ち会いながら、にもかかわらず、あえて「語 り、語ることも描くことも不可能な瞬間にあえて もきわだたせるという高度な戦略を作品に導入し との限界とともにみずからの位置どりの微妙さを 的な主体こそ、ここで「話者」と名付けられたも り」、あえて「描く」機能を行使するという逆説 ている。そのように、自分には語りえないことが 描きえないものもあると語ることで、つま

箇所の一節に「人」という語があることにもあらわれていは、何よりもまず『作品』の言葉を読む」という先の引用

散文を機能させるのはやはり「人」なのであ

17

しかし、散文はそれだけでは機能しない。「確かに、人

距離を置くという点においてである。それとひきかえに著

して明らかにしたように、徹底的に「人」という概念から

が「いささか」をはじめとした副詞的表現をとっかかりに ヴァリー夫人」論』の著者が際立つのは、ついさっき我々 種の読みの方法を提示したのは間違いない。しかし、『「ボ 云々したり、そこに感情移入してみせる批評にしても、

者が得たのは「散文」だった。

ることが、読むことを可能にする。

八〇年代にも増して、この二〇一〇年代という時代が

真に感動的な所以もある。そこにあるのは時代が

まったくもって初歩的な知的作業なのであり、にもかかわ

書物なのである。しかもその話題の中心は〝読む〟という

らずそれを昂奮や感動とともに語りうるところに、本書が

り方を忘却しつつあるという意識である。批評的不毛は、

ことの退廃に発したものである。そし

″読む″という営みから限りなく遠くへと漂流し、そのや

まさにこの"読む"

そんな「人」を得るために著者が試みたのが、徹底的に だが、『ボヴァリ 夫人』の「話者」は、 自分の

言を行ってきたのである。エンマ・ボヴァリーの人物像を

てみれば、これまでも数々の批評家が読むことをめぐる宣

しかし、人はいかに読むことについて語りうるか。考え

を十分に欲しえたのである。

だからこそ、私たちの時代は『「ボヴァリー

夫人」論』

159 蓮實重彦を十分に欲するということ

みであり、それこそ、「優れた散文の文章」の力言葉のもらす吐息ともいうべきものに聞き入るの

によるものにほかならない。(中略)

批評的な『話者』は生まれるのである。 世見失ってみせること。そうしたプロセスを通してこそ、がら、最後の最後で対象を読み誤ってみせること。あるいがら、最後の最後で対象を読み誤ってみせること。あるいいら、最後の最後で対象を読み誤ってみせること。あるいいら、最後の最後で対象を読み誤ってみせること。あるいがら、最後の最後で対象を読み誤ってみせること。まさに著者自身が距離の保持を通して『ボヴァリー夫人』とは、まさに著『ボヴァリー夫人』のこの「高度な戦略」とは、まさに著『ボヴァリー夫人』のこの「高度な戦略」とは、まさに著

性も大いにありうる」(二五七)ことに注意を促している。たりしただけの『他人の言葉』の無意識の反復である可能に彼女の思いとはいっさい無縁の、どこかで読んだり聞い調してきた。第Ⅳ章では著者は、エンマの口にする言葉がものがありえないことを、著者は口がすっぱくなるほど強ものがありえないことを、著者は口がすっぱくなるほど強ものがありえないことを、著者は口がすっぱくなるほど強

る。(二五七) でもおいて、人はいつでもおのれの「意識」を言葉にしているわけではなく、書物で読んだりふと耳にした他人の言葉をまるで自分の読んだりふと耳にした他人の言葉をまるで自分ので意識」を言葉にしているわけではなく、書物でついっクションにおいて、人はいつでもおのれのフィクションにおいて、人はいつでもおのれの

たいどういうことなのか。それが安易な〝正確さ〟への信そんな不可思議なフィクションなるものを読むとはいっ

る。ごく簡単に言えば、ちょっとずるい。 と題された第K章。著者はまず『ボえば「言葉と数字」と題された第K章。著者はまず『ボスば「言葉と数字」と題された第K章。著者はまず『ボスにやや戸惑わざるを得ないだろう。だって、そもそも「原理」がないとたった今強調したのはだって、そもそも「原理」がないとたった今強調したのはだって、そもそも「原理」がないとたった今強調したのはだって、そもそも「原理」がないとたった今強調したのはだって、そもそも「原理」がないとたった今強調したのはだって、そもそも「原理」がないとたった今強調したのはだって、そもそも「原理」がないとだった。 著者であるあなたじゃないですか? と思う人も出てくる。読者であるあなたじゃないですか? と思いかはこめられてきたものとは到底言えないだろう。

題提起らしさにこだわりすぎないことが肝心になる。ヴァリー夫人」論』を上手に読むためには、問題提起の問ほどの比重はおかれていない。別の言い方をすると、『「ボデミックな論考とはちがってQ&Aの「Q」の部分にそれ

そが読みの現場では起きうるし、起きねばならない。第Xとして示すことにあるということも関係している。読むとは――そしてひいては語るとは――そしてひいては語るとは――Q&Aというようなとは――そしてひいては語るとは――Q&Aというようなとは――そしてひいては語るとは――Q&Aというようなとは――そしてひいては語るとは――Q&Aというようなとして示すことにあるということとも関係している。読むとして示すことにあるということとも関係している。読むとして示すことにあるということも関係している。読むとして示すことにあるということを関係している。

の著者のやり方なのである。 のである。浅薄な人物主義とも無縁。そのかわりに『『ボヴァリー夫人』論』 なの発見もあれば、ときには狂喜乱舞や苛立ちも、あるいは執拗なこだわりもありうる。そんな読みという行為の実は執拗なこだわりもありうる。そんな読みという行為の実は執拗なこだわりもありうる。そんな読みという行為の実情を、ときに実況中継をまじえ、ときに実験室で顕微鏡を前にした白衣の科学者を演じてみせながら、しかし、最終的にはあくまで啓蒙的な配慮とともに我々に届けようといります。 である。 ときにまがられないのは明白である。浅薄な人のがこの著者のやり方なのである。

『「ボヴァリー夫人」論』を読むためのコツ

あるいは各章における著者の問題設定が簡単には見えなとのである。人類はそもそも読むことが苦手なのだ。です! などと泣き言を言う読者もいるかもしれないが、です! などと泣き言を言う読者もいるかもしれないが、です! などと泣き言を言う読者もいるかもしれないが、では達せられていると見ることができる。読むとは難しいことなのである。人類はそもそも読むことが苦手なのこだわりは、そうした対人的な配慮とも密接につながっている違せられていると見ることができる。読むとは難しいことなのである。人類はそもそも読むことが苦手なのこだめは、そうした啓蒙性は、もちろん読者とのきちんとした約束

を引っ張り出してくることで完結するのが習いだが、たとはQ&Aの形で、自分で提示した問題に対し、自分で答えいと洩らす人もいるだろう。「論」というものは基本的にいと洩らす人もいるだろう。「論」というものは基本的に

まの中でやがて明かされる「三」という数学の意味などにしても、冒頭で立てられた「三部構成の『三』には、はたしても、冒頭で立てられた「三部構成の『三』には、はたい。にもかかわらず、我々読者は「三」が「文字通りの不い。にもかかわらず、我々読者は「三」が「文字通りの不快きわまりない脅威をもたらす不穏な数字」(五九八)だと快きわまりない脅威をもたらす不穏な数字」(五九八)だと思わず青ざめたりしながら、感動しさえする。読みが出来思わず青ざめたりしながら、感動しさえする。読みが出来まして、事件として、体験として実演されている証左である。

ど『ボヴァリー の奥に目をむけなければならない。その上で読む。なるほ 説したポイントが、今、あらためて力説されるべき時がき という、 の言葉』の無意識の反復である可能性も大いにありうる」 しているのである。エンマの言葉が「彼女の思いとはいっ 縛られた機械的な言説が横行しつつある。他方、 たことと平行して起きている。一方にはQ&A的な思考に さい無縁の、どこかで読んだり聞いたりしただけの『他人 しばしばカラ威張りに終わる。言葉をめぐる鈍感さが横行 も語ることに熱心な批評家がいる。読みを欠いた語りは、 たのだろう。剽窃かどうかを安易に問題にするよりも、そ 読むことの退廃は、おそらく批評家が、話者性、を忘れ かつて八〇年代に著者が口がすっぱくなるほど力 夫人」論』は切実に欲せられているので 読むより